

書籍紹介

「自衛官が語る災害派遣の記録―被災者に寄り添う支援」

監修・桜林美佐、編集・自衛隊家族会・並木書房発行



自衛隊の災害派遣は、昭和26年のルース台風の災害派遣以来、70年あまりの間に4万件（年間500～900件）を超えています。激甚災害時の人命救助や復旧支援をはじめ、離島での救急患者の輸送、不発弾処理、水難救助、防疫に至るまでその活動は広範多岐にわたります。しかし「災害派遣の「現場」で何が起きているか」について、寡黙な自衛官たちはこれまで多くを語ることはありませんでした。

他方、毎年の世論調査では、今や当たり前のように90%前後の国民が「自衛隊に好印象を持っている」と回答します。また、自衛隊の期待する役割は、「災害派遣」約80%、次いで「国土防衛」約60%となっており、災害の「現場」で被災者の立場に立って黙々と任務を遂行する自衛官達の姿に対する支持・共感であることは容易に想像できます。

これらから、平成27年以来、「おやばと」2面に『回想 自衛隊の災害派遣』をシリーズ化して、これまでの主要な災害派遣で実際の業務にかかわった陸海空自衛隊の指揮官・幕僚・隊員たちにその時の苦労話や「現場」で感じ、考え、体験したことなどを率直な「回想」として執筆をお願いした所、すでにOBになっている人を含め、37人の指揮官などから投稿いただきました。

この度、自衛隊の災害派遣の貴重な「記録」をそのまま葬り去るのはあまりにもったいないと考え、『美佐の新国防論』でお馴染みの桜林美佐氏に監修をお願いした所、災害派遣に関する様々な視点での分析に加え、当事者たちには書けない指摘や将来の問題提起までの確にまとめていただいた上、並木書房編集部に渾身の力を振り絞っていただき、本書が完成しました。

このような書籍の発行は、自衛隊家族会の新たな事業でもあります。その主目的は、この後発行を予定している『回想 国際任務』と合わせて、「広く自衛隊の国内外活動等に対する国民の理解を得る」ことにありますが、家族会員の皆様にお読みいただければ、改めて「自衛隊員を家族に持つ」「誇り」を感じていただけることでしょうか。また、現役の自衛隊員にお読みいただければ、自衛隊の災害派遣の実態と諸先輩が辿ってきた歴史を理解でき、明日への活力と任務遂行意欲を掻き立てくれるものと確信しております。

改めまして、執筆者の皆様、桜林美佐様、そして並木書房編集部の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、読者の皆様には、執筆者や監修者が発する一語一語の「重さ」やそこに秘められた「想い」をくみ取ってお読みいただきますようお願い申し上げます。紹介と致します。お問合せなどは家族会事務局か直接、並木書房までお願い致します。

（「おやばと」編集委員）